

# 不定詞節内の照応表現: 第二言語習得における束縛原理AとB Anaphoric Expressions in Infinitival Clauses: Binding Principles A and B in SLA

鈴木孝明・重田明将・人見瑞穂(京都産業大学)  
Takaaki Suzuki, Akimasa Shigeta, Mizuho Hitomi (Kyoto Sangyo University)

## 要旨 Summary of Our Findings

1. Can Japanese learners of English correctly interpret anaphoric expressions in infinitival clauses?  
→ University students had difficulty in identifying the antecedents of reflexives and pronouns.
2. Why difficult?  
→ a) knowledge of **PRO** as well as **Binding Principles** is required  
b) transfer of **subject orientation** for reflexives
3. Developmental difference between reflexives and pronouns?  
→ **No** (at least tentatively)
4. Effects of main verb types?  
→ No difference between *want-type* and *tell-type*
5. What kind of errors?  
→ all errors are compatible with the grammar of natural language

## 不定詞節内の照応表現 Anaphoric Expressions in Infinitival Clauses

	want-type (subject/object control)	tell-type (object control)
再帰代名詞 Principle A (local binding)	John wants Tom [PRO to shave himself]. John wants [PRO to shave himself].	John tells Tom [PRO to shave himself]. *John tells [PRO to shave himself].
代名詞 Principle B (no local binding)	John wants Tom [PRO to shave him]. John wants [PRO to shave him].	John tells Tom [PRO to shave him]. *John tells [PRO to shave him].

## 先行研究 Previous Studies

- Tensed-infinitive Asymmetry (Yuan, 1994): L2学習者は定形節では束縛原理に従うのに、不定詞節では難しい
- 束縛原理AとBの比較: 差がないという提案 (White, 1998)、代名詞の方が再帰代名詞よりも難しいという提案 (Shirahata, 2007)
- 主節の動詞タイプ (Akiyama, 1999; Urano, 2000): PROの特定化 want-typeの方がtell-typeの動詞より難しい

## 実験 Experiment

- 不定詞節内の再帰代名詞と代名詞の両方を調査する
- 主節の動詞タイプの影響を再帰代名詞だけでなく代名詞でも調査する
- 造語動詞を含めることにより want-typeの主語コントロールによる肯定証拠がL2学習者の困難を招くのかどうかを確かめる

### 予測 (predictions)

- 不定詞節内の再帰代名詞と代名詞の解釈には束縛原理だけでなくPROに関する言語知識も必要とされる。よって、再帰代名詞と代名詞の両方において困難が予想される。
- Shirahata (2007)の結果に基づけば、代名詞の方が再帰代名詞よりも難しいことが予測されるが、White (1998)の提案によると差はないことが予測される。
- Urano (2000)が提案したwant-typeとtell-typeの差が本実験においても観察されれば、tell-typeの方がwant-typeよりも易しいはずである。また造語動詞に関しては、tell-typeと同じように主語コントロールとしての肯定証拠が与えられていないので、want-typeよりは易しいことが予想される。

被験者 subjects: 大学生外国語学部英米語科2年生27名 (ITP TOEFLのスコア平均は500点以下)

実験文 (test sentences): 8タイプ (4トークンずつ)

Daisuke wants Keita to wash him. (代名詞, want-type)  
Akio tells Hirotsuke to love him. (代名詞, tell-type)  
Akira gares Hiroshi to hurt him. (代名詞, nonsense)  
Junko wants Erika to love herself. (再帰代名詞, want-type)  
Tadashi tells Masao to hurt himself. (再帰代名詞, tell-type)  
Masamitsu gares Toru to wash himself. (再帰代名詞, nonsense)

- 主節に使用した動詞 (main verbs)  
want-type: want, wish, prefer, expect  
tell-type: tell, advise, ask, encourage  
nonsense: gare, suboot, prish, meap
- 不定詞節内に使用した動詞 (verbs in an infinitival clause)  
wash, cut, like, see, touch, criticize  
protect, believe, hurt, hate, hit, love

例 (Example): 下線を引いた語が表すのは誰か、4つの選択肢から選んでください。英文の前には、まずその文が使われる状況が日本語で提示されています。

- 状況: 大介と啓太はサッカーをしていて、今や二人とも泥んこです。
- テスト文: Daisuke wants Keita to wash him.
- 選択肢: (a) 大介でも啓太でもよい、(b) 大介のみ、(c) 啓太のみ、(d) 大介と啓太以外のだけか

## 結果 Overall Results: proportions

	correct	opposite	both allowed	neither allowed
Pronoun	58.8%	26.9%	8.8%	5.6%
Reflexive	56.0%	30.6%	12.5%	0.9%

註: correct: 正しく局所束縛のみまたは長距離束縛のみを選択  
opposite: 本来の値とは逆の選択  
both allowed: 局所束縛と長距離束縛の両方を許す解釈  
neither allowed: 文中に現れていない長距離束縛のみの解釈

- ◆ どのタイプの文でも4つの選択肢の中では正解の選択が一番多かった (L2 learners selected 'correct' more often than any other choices.)
- ◆ 正解率は決して高いものではないが偶然性のレベルではない ( $p < 0.01$ ) (Their choice of 'correct' was relatively low but it was not at a chance level.  $p < 0.01$ )

## 統計結果 Statistical Results

それぞれの選択に関して照応形タイプ (pronoun/reflexive) の効果と動詞タイプ (want/tell/nonsense) の効果を分散分析 (two-way repeated-measures ANOVA,  $p$ -level = 0.05) により検証

- Correct response: 動詞のタイプにのみ有意差 ( $F(2,26) = 3.738, p < 0.05$ ) nonsense verbが他より低かったため → See Fig. 1
- Opposite response: 動詞のタイプにのみ有意差 ( $F(2,26) = 6.036, p < 0.01$ ) nonsense verbが他より高かったため → See Fig. 1
- Bothに関して: 有意差なし
- Neitherに関して: 照応形タイプに有意差 ( $F(1,26) = 5.571, p < 0.05$ ) 代名詞が再帰代名詞より高かった → See Fig. 2

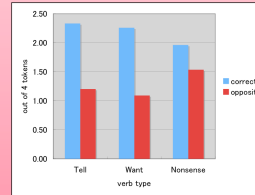


Fig. 1 動詞タイプ別によるcorrect/oppositeの選択

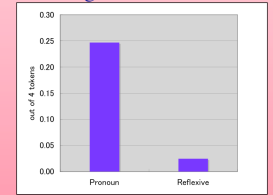


Fig. 2 照応形タイプ別によるneitherの選択

## 個人データ分析 Analyses of Individual Data

nonsense動詞をのぞく8トークンの分析を行ない6トークン(75%)以上がどこかに集中していた場合、それを個人の規則性とみなして分類 (27人中19人(70%)に何らかの個人的規則が存在することがわかった)

	Reflexive local	Reflexive no rule	Reflexive long-distance
Pronoun long-distance	5人	4人	0人
Pronoun no rule	6人	残りすべて	2人
Pronoun local	0人	0人	0人

その他2名は以下の通り

- 再帰代名詞のみlocalもlong-distanceも可能
- 再帰代名詞はlocalもlong-distanceも可能で代名詞はlong-distanceのみ可能

## 結果のまとめ

- 再帰代名詞と代名詞の両方に困難がみられた → YuanのTensed-infinitive Asymmetryは再帰代名詞だけでなく代名詞にも当てはまる。この困難さの原因は束縛原理だけでなくPROを特定化するための知識が必要であること、また再帰代名詞に関しては日本語の主語指向性 (subject orientation) が転移している可能性も考えられる。
- 再帰代名詞と代名詞の習得の差は見られなかった → White (1998)の提案を支持する結果となったが、正解を選べた被験者の数が少ないのでもう少し習熟度の高い学習者を調査する必要がある。
- tell-typeの方がwant-typeよりも易しいという結果は得られなかった。また、造語動詞がtell-typeと同じように扱われることもなかった。→比較的習熟度の低い学習者にとっては、want-typeの主語コントロールは不定詞節内に起こる照応表現の誤りの原因とはなっていない。Urano (2000)の結果に観られた動詞効果は、習得の過程を反映したのではなく、上級学習者のストラテジーを示しているのかもしれない。
- 正しく先行詞を特定できなかった場合も自然言語に存在しないルールを使用することはなかった → 中間言語文法は自然言語の規則を基盤として発達する。